

「第1回九州ブロック クラブ育成推進協議会」開催報告

日時:平成17年10月1日(土) 13:00~17:00

会場:沖縄県体育協会 会議室(那覇市)

台風19号の接近を気にしながらも、平成17年10月1日(土)に「第1回九州ブロッククラブ育成協議会」が沖縄県那覇市において、無事、開催されました。この協議会には、日本体育協会から2名、地方企画班員5名、そして福岡県・佐賀県・宮崎県・大分県・鹿児島県・沖縄県の県体協担当者・育成指定クラブ関係者28名、オブザーバー(福岡教育大学学生)1名、総勢36名が参加しました。

この協議会では、各県体協担当者から委託事業の進捗状況についての報告が行われるとともに、「総合型クラブを動かす組織づくり」(第1グループ;8名)、「総合型クラブを支える人づくり」(第2グループ;9名)、「魅力あるスポーツ事業づくり」(第3グループ;9名)、「既存団体・組織等との良好な関係づくり」「広域スポーツセンター等の支援方策づくり」(第4・5グループ;7名)といったような総論的な4つのテーマ毎に分かれて、活発なグループ・ディスカッションが行われました(希望人数の関係上、第4グループと第5グループを合併)。



以下では、各グループのアンカーパーソン(各班員)から、当日のディスカッション内容について報告して頂きます。

【第1グループ】(アンカーパーソン・報告;中平稔人 九州ブロック地方企画班員)

各クラブともに様々な課題が提起されたが、ある地域では、これまではすべて行政のお膳立てしたスポーツ行事に「参加」し、賞品をもらって帰るという形態で「会費を払ってスポーツを行う」という感覚が皆無であることが大きな課題とされた。

また、ある地域では、公民館活動を母体に総合型の組織づくりに取り組んでいるが、公的活動のため、これもやはり「会費を払って」という感覚にかなり抵抗があるようである。さらに、既存クラブとの関わりをどう考えるのか、との悩みも出された。これに対しては鹿児島県アドバイザーより県内の事例が紹介され、既存クラブとの協働のヒントが得られたようである。

「組織づくり」というテーマに結びつく協議がなかなか進められなかったが、協議の中での意見を踏まえて組織づくりを考えると、「有機質な組織づくり」のためには、概ね以下の点をイメージすることが重要であるということが共通理解できた。

同一の理念を共有できることが不可欠。これがないと「組織」ではない。

(そのためには) 共有できるエリアまで考えを掘り下げることが必要。

(しかしそうすると) 理念がぼやける可能性もある。

クラブの活動が組織員・会員に見えるしくみを有していることが「組織」には不可欠である。

会員が会員であることに意義を感じるクラブでなくてはならない。

(そのためには) クラブ内に役割があることが必要。

「会費制」を考える上では、何にならお金を出すのかを考える必要がある。

「組織づくり」のためには県体協・広域の支援が必要となる。

(ある地域の現状) 組織づくりの話し合いの席に関係者がついてくれない。

2年間という短い取組期間の中でのクラブ設立には大変な苦労を強いられるが、いろいろな地域での取組の情報を共有することで、設立を進めるヒントが見いだせていくのかもしれない。

【第2グループ】(アンカーパーソン・報告;高橋 健 九州ブロック地方企画班員)

総合型地域スポーツクラブ設立において課題とされる「ヒト・モノ・カネ・情報」のなかで最も重要になる「ヒト」について様々な意見交換を行った。

クラブマネジャーについて

行政主導型で総合型地域スポーツクラブの育成定着を行っている地域では、キーパーソンとなるクラブマネジャーの役割を行政担当者が兼任しているケースが多く見受けられる。なぜそうしたケースが多いのかは皆様もお分りの通り、仕事として保障ある立場で活動ができるからである。クラブで専属のクラブマネジャーを雇うとすると、最低でも年間 300 万円位はかかる。そうした理由から、専属のクラブマネジャーを配置するのは無理ではないかという意見や、クラブが利益誘導型になっているという意見が出された。

個人的な意見であるが、総合型地域スポーツクラブにおける運営委員や指導者がスポーツボランティアに対する共通理解のあり方を再度確認する必要性を感じている。

組織について

総合型地域スポーツクラブ設立準備委員会には、有名無実の役員が多々みられる。どこのクラブも似たり寄ったりである。その傾向を見直すために、2年に1回は運営委員会の役員の見直しを行っているクラブもある。「やる気」や「夢」のある人が運営した方がいいクラブはできていくが、そこには偏りや依存心が生じる。今までのスポーツのあり方と何ら変わりが生まれてこないため、やはり新しい人材を発掘していく必要がある。

まとめ

クラブに関わる人材を育てていく時に、メリットをぶらさげて勧誘するのではなく、同じ思いや同じ夢を持っている人を探していく。メリットを求める人には、「メリットは最初からあるものじゃなく、今から創るもの」という考え方でクラブの支援者を見つけていけばいいのではという意見が出された。総合型地域スポーツクラブの素晴らしさを 100 人全てに理解してもらうにはまだまだ時間がかかる。それこそ 10 年、20 年、いや 100 年かけて、地域に根ざしていかなければならないと語っておられた。

【第3グループ】(アンカーパーソン・報告;宮良俊行 九州ブロック地方企画班員)

クラブ関係者にはクラブの現状とテーマについての課題を、一方、県体協関係者には県内のクラブの状況とテーマについての課題をそれぞれの立場で発表していただいた。

その結果、魅力あるスポーツ事業に関する課題として、以下のような事柄が提出された。

商業施設(ボウリングセンター)を拠点(クラブハウス)として、ボウリングと卓球



を核にした総合型地域スポーツクラブづくりをすすめている。会員のニーズに合わせた種目の増加や地域、自治会、学校等への広報活動が難しいのが課題である。それに対する対処方法としては、行政との協力や営業担当者の配置などではないか。

クラブが行っている事業が、地域の人にとって魅力あるものであるのか。地域や行政が行っている事業と比較して、参加したいと思うような違いがある内容にするにはどうすれば

よいかという課題に対して、地域にない種目、これまでに行っていない教室、行政が行えないイベントなどの事業を取り入れる必要があるのではないか。

人口の少ない地域では、協力してくれるスタッフやイベントを行った際の参加者確保が大変である。やはり広報活動をいかに充実させていくかがポイントである。

これまでのスポーツ事業は、スポーツの苦手な人がなかなか参加できない雰囲気があったので、地域の文化行事などとコラボレーションして魅力あるものにすることが大切である。

【第4グループ】(アンカーパーソン・報告;谷口勇一 九州ブロック地方企画班員)

第4・5グループでは、「既存団体・組織等との良好な関係づくり」「広域スポーツセンター等の支援方策づくり」について議論した。

まず前者に関しては、新規で立ち上げようとしている育成クラブが地域内の既存クラブといかにして関係を構築していくかという点について意見が集中した。その際、既存クラブからは総合型クラブ化していくことに対するメリットとはいかなるものかという疑問が多く出されるようである。この点に関しては、「メリットをお互いに創造していくことにこそ総合型クラブの意味があるはず。メリットという言葉に過剰なプレッシャーを感じることなく、むしろ現状の活動に存在するデメリットを見つめなおしましょう」という結論になった。

広域スポーツセンターの支援方策に関しては、いかにしてクラブをその気にさせていけるかという「しかけ」の重要性が議論の焦点となった。所管内のクラブネットワークの構築はもとより、クラブづくりを良い意味で競い合える「コンテスト要素」の導入を検討してみてもという具体的な意見も出た。

(全体調整・報告;中西純司 九州ブロック地方企画班長)